

[原著論文]

天華学院における日本語教育の現状と課題
－上級日本語教育実践を中心に－

呉 素蓮¹⁾，松田 高史²⁾

Current Work and Related Issues Concerning Japanese
Language Teaching at Tianhua Institute:
A Study of the Advanced Japanese Language Teaching and
Learning

Sulian WU¹⁾，Takafumi MATSUDA²⁾

Abstract

This article discusses the state of the current Japanese language education in private institutions of higher education in China, focusing mainly on the specific practices in the Japanese Department at Tianhua Institute of Shanghai Normal University. It provides an analysis of the current teaching and learning practices, from its curriculum design to teaching methodology. The faculty members of the Japanese Department have made innovative reforms to adjust their teaching to the students' actual abilities in such courses as "Advanced Japanese," "Composition," "Translation," "Business Japanese," "Selective Readings of Literature," "Classic Japanese," and "The Final Thesis." Through their practical experience of teaching, the faculty members not only gain first-hand experience but also manage to put their innovations to real test. In addition, the article outlines the major issues in the advanced Japanese language teaching that require more attention, such as the overemphasis on grammar in the curriculum; the lack of such content that is specialized but highly practical; the need to improve course syllabi; the difficulty in recruiting students, resulting in the discrepancy between the target enrollment number and the actual number of students enrolled; the inadequacy of professional exchange among the young and inexperienced faculty members; and the urgent need to train more qualified young instructors. This study of the current state of the Japanese language teaching at the advanced level at Tianhua Institute reveals that there is much room for improvement. The writer hopes that such a study can help other Japanese language programs in private institutions in China improve their performances in teaching and learning.

KEY WORDS : Japanese language education, Tianhua Institute, curriculum; teaching methodology; innovative reforms

1) 上海師範大学天華学院
2) 九州共立大学経済学部

1) Tianhua Institute of Shanghai Normal University
2) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Economics

1. はじめに

中国における教育改革は、1980年代半ばに入って経済体制改革とともに全面的に展開された。1950年に廃止された私立高等教育機関も再び開設できるようになり、1990年代の初めからは、市場ニーズに合わせて私立教育機関が増え続けている。これは、「改革・開放」政策による急速な経済発展で社会及び国民の教育への期待と要求が高まり、教育体制・形態の多元化が可能となったからである。その結果、私立高等教育機関は雨後の筍の如く新設され、その著しい発展は中国の教育に大きな変革をもたらしている。

天華学院は、このような時代を背景に、2005年に上海師範大学の「独立学院[※]」として創立された、学位授与権限をもつ4年制本科教育の高等教育機関である。日本語学科は設立当初の6つの学科の一つであるが、まだ歴史が浅いことから、試行錯誤しながら私立大学における日本語教育に積極的に携わっている。

本研究は、中国の私立大学に設置された日本語学科のカリキュラムや教学面について、現地の状況を踏まえてその現状と特徴を明らかにし、さらに中国の大学教育において、天華学院のような私立大学の日本語教育が抱える課題について考察するものである。

2. 天華学院日本語学科のカリキュラム

天華学院の日本語学科は、確実な日本語力と広範な科学文化の知識、すなわち外交、貿易、文化、新聞、出版、教育、科学研究、観光等の分野において翻訳、研究、教授、管理業務に従事することのできる、ハイレベルかつ専門的な日本語を身につけた人材の養成を教育目標としている。

学生に対しては、下記のような言語、文学並びに人文・科学技術の基礎知識を理解し、身に付けることを求めている。

- 1) 十分な異文化間コミュニケーション能力
- 2) 確実な日本語力を取得し、読む、書く、聞く、話す、翻訳する能力
- 3) 我が国の国情と日本の社会や文化の理解
- 4) 第二外国語を現実に応用できる能力

5) 論理的思考力、創造力、ビジネス能力及び実際の業務遂行能力

また、下記の7つの資格の取得が望ましいとされている。

- 1) 日本語能力試験2級（日本国際交流基金実施）
- 2) 専攻日本語能力試験四級（中国教育部日本語指導委員会実施）
- 3) 大学英語能力試験四級（中国教育部英語指導委員会実施）
- 4) 大学パソコン能力評価試験（上海市教育局試験センター実施）
- 5) 日本語能力試験1級（日本国際交流基金実施）
- 6) 専攻日本語能力試験八級（中国教育部日本語指導委員会実施）
- 7) 大学英語能力試験六級（中国教育部英語指導委員会実施）

卒業までに修得しなければならない合計単位数は164単位であり、そのうち日本語教育に当たる部分は107単位、総授業時間数は2,110時間が当てられている。この時間数は、日本語能力試験1級の認定基準に示される900時間という学習時間に比べればかなり多いが、日本語使用環境ではない海外の学習機関で十分な教育を行なうためには、このくらいの時間数が必要だとの判断による。

このように、天華学院日本語学科は、非常に多くの授業時間を日本語そのものの教育に当てている。そのほとんどは必修科目、かつステップ履修科目であり、特に1・2年次の教育は非常に集中的に行なわれている。入学直後のゼロ初級からの2年間は精読を中心に据え、会話と聴解により「話す」ことと「聞く」ことを補強している。これは、学生が即座に日本語で反応できるようになることを目標に組み立てられたコースデザインで、3・4年次になってからは、精読のほかに「考える」ことを伴う新聞講読、作文及び知識を広めるための文学作品選読、ビジネス日本語などの時間も置かれている。

※ 独立学院とは、修士学位の授与権を持つ国公立本科大学と社会の力（企業、事業体、社会团体又は個人とその他協力能力を有する機構）が連携して開設した高等教育機関を指す。法人格の独立、学生募集の独立、キャンパス・施設の独立、教育運営・管理の独立、独立採算、卒業証書の独立などが特徴

である。母体大学の学科、教員、設備の諸条件や運営経験等の強みを生かし、かつ本科レベルの教育を実施しているため、「裸一貫で事業を興し」、かつ専科レベルが中心の民間大学に比べると、社会的な認知度と就職面での競争力が明らかに高い。

3. 教育・指導の実態

3-1 専攻科目

「基礎日本語」は日本語学習最初のメインとなる科目で、2年後期までに主に「精読」授業を通して、発音、語彙、文法、読解等が総合的に指導される。中心となるテキストは『新編日語』（上海外国語教育出版社）1～4である。これは日本語初心者を対象にした教材で、レベル的には、語彙、文型、読解において日本語能力試験の2級程度までをカバーできる内容となっている。メイン科目「精読」のほかには、「聞く」「話す」「書く」「読む」「文法」「日本事情」などの科目が設置されている。

また、3年から4年前期までの学習段階におけるメイン科目は「上級日本語」となる。やはり「精読」が中心で、全授業時間数の約半分を占めているが、「上級日本語」は学生の応用技能をさらに伸ばすための科目、総合的に指導する科目として位置づけられている。使用テキストは『日本語総合教程』（上海外国語教育出版社）5～8である。レベル的には、作文、翻訳、日本文学作品、古典などにおいて、専攻日本語能力試験八級程度までをカバーできる内容となっている。

「上級日本語」の授業中の使用言語は、(教師、学生ともに)100%近く日本語のみである。これは、教室の外へ一歩出れば外国語はほとんど使われない環境の中で日本語を身に付けさせるためには、このくらいの厳しさと緊張感が必要だという認識による。授業は、日本語教育の根幹となる部分をベテランの中国人教員が担当し、会話、作文、新聞講読などは主に日本人教員が担当する。また、メインテキストを除き、これらの教材の選択採用もシラバス作成も、その年度の担当教師に任されている。

3-2 指導法

天華学院は設立されてから未だ10年に満たない。しかしそれがゆえに、伝統のある大学とは異なり、従来の教授法、指導法などに捉われず、様々な面において積極的に改革を試みようとしているところに、大きな特徴がみられる。日本語学科においても、若手教員のみならず中堅ベテラン教員にも、各自の担当科目の指導法について常に研究し、改善しようという姿勢が、この研究調査を通して散見された。以降、この指導法改善の実際を、特に「上級日本語」科目について記す。

3-2-1 精読指導

上級とは、初級・中級を修了してから、日本人と同等のレベルに到達するまでを目指す段階を指す。「日本人と同等のレベル」という表現が曖昧であるように、上級の意味も曖昧であり、中級と上級との境界線も明瞭ではない。しかし一般的には、語彙数10,000程度、漢字数2,000程度の修得が上級レベルの内容ととらえられている。

上級では、教材においても、教授法においても、学習目的別という側面が、初級・中級の場合以上にはっきりと現れてくる。教える側としては、この点に対する配慮を怠らないことが肝要となる。

天華学院日本語学科の授業では、予習を原則とし、語句や文型の説明は必要最小限度にとどめるべきと考えられている。教室では、できるだけ現実に近い場面を作り、そこで適切な言語的対応ができるように練習が繰り返される。初級・中級に比べ、「聞く・話す・読む・書く」の4技能を総合的に働かせる練習が必要になるが、実際の授業は、練習の重点をどの技能に置くかを意識して行っているように見受けられた。たしかに、そのほうが能率的であろう。

初級・中級においては「正確さ」が第一義的に求められたのに対し、上級では、「自然さ・流暢さ」の獲得が主要な目的となる。したがって、初級・中級での学習事項が完全にマスターされていないなどの理由で間違いが生じた場合は、的を絞って訂正する方が良い。1分スピーチなどの中にかかなりの誤りが認められたとしても、事後の注意は、たとえば、「形容詞＋名詞」の間に「の」を入れてしまう癖だけを指摘して、まずそれを直させる。訂正事項が多すぎると、どの事項の矯正も満足にできなくなるばかりでなく、「自然さ・流暢さ」の練習が犠牲になってしまう恐れがあるからである。

予習は、上級においては絶対にすべきことである。そのため授業では、教師が教科書の朗読の音声ファイルを用意するなど、学習者の予習の便を図っていた。最終的には、学習者自身の判断できちんと予習ができるようになっていくことが望まれるのであり、上級の学習目標はそれを可能にすることにあると言っても過言ではない。

宿題としては、学習者が将来解決しなければならないはずの課題が与えられていた。たとえば、大学院進学を志す学習者の場合、教科書に関連する資料を紹介したうえで、そのレジュメを作らせ、レポートにして提出させたり、みんなの前で発表させたりするの

である。そして、そのフィードバックは、たとえば、口頭発表の場合なら、ビデオに収録しておき、それを見せることによって自身の口頭発表の問題点に気づかせる、といった方法で、つまり学習者を中心とした形で行うのが望ましい。

3-2-2 作文指導

日本語作文の授業では、単なる日本語での文章作成練習にとどまらず、一定の決められた長さの文章を書く能力、しかも読む人に自分の言いたいことをきちんと伝える文章構成能力があわせて要求された。しかし、その二つの能力を養う道も、まずはより多くの日本語作文を書くことであると認識されている。

授業では、日本での作文同様に400字詰のマス目の原稿用紙を使い、縦書きで書く。まず書き方の基本を教え、中国語文と日本語文で表記方法にどのような違いがあるかを理解させる。また、作文は常体文で書くため、敬体文と常体文の違いをきちんと習得させる。題材としては、言いたいことをしっかり書き込むことが大事であるため、「体験」を書くよう指導されている。

時間配分は、講義が三分の一、作文が二分の二であり、時間が足りなければ宿題となる。講義では、日本人のルールを学んだ後、文章構成を身に付けるため、日本の新聞社説などの要約文作成練習をする。これは、卒業論文の「概要」作成に不可欠な練習ともなっている。

授業では日本の小説も読ませており、学生は読後に感想文を書くが、この時は、主語を省くという日本語文章の特性を認識させている。これは、日本語を使いこなす上で、重要な練習とも言えるであろう。また、外国人にとって最も書きにくい手紙の書き方も学習する。課題練習では、特に敬体文の書き方や敬語の使い方を修得する。日系企業に入ればもちろんだが、卒業後に日本語を使って働く機会があれば、日本人との手紙を通じた交流は欠かせない。現在ではメールでのやり取りが主となるであろうが、公式なお礼や依頼の場合は、手紙が必須となるためである。

作文は添削したものを返し、一定程度溜まったところで、マンツーマンでの指導がなされる。作文能力は個人差が大きいことから、具体的な指導は個人ごとにやるという方法は理に適っている。普段から作文練習をしているため、テストは期末の1回だけとなるが、その場合、結論が明確で分かりやすいかを主にした「作文能力」と、日本文の表記が正しいかどうかを主にした「日本語能力」の二つを各50点で計算した100点満

点で評価する。

※指定教材 北京第二外国语学院日語系編『日語写作教材』

※参考教材 福永平和『実戦・マスコミ論作文上達法』実務教育出版 1997～2000年版

3-2-3 翻訳指導

語学学習は、「聞く、話す、読む、書く、翻訳」を基本とする。天華学院の日本語学科では、日訳科目を三年生から設置し、本格的な翻訳技術を身につける応用教育の第一歩に据えている。授業では、単に翻訳理論を学ぶだけでなく、実践の中で適切な翻訳技能を養う工夫がなされていた。また、翻訳では日本語の基礎実力はもとより、中国語の確かな素養も求められるが、その面での教育も充実していた。では、実際の授業はどのように進められているか。

教師は学生Aに対し題材となる文章を与え、これを翻訳させる。ついで、完成した翻訳文を学生Bに示し、問題点を指摘させ、さらにそれを学生Cに判断させるというような手順を踏み、最終的には教師がコメントを加えることで、一番適切な翻訳文の例示がなされる。また、学生に配布するプリントにも教師が必要なコメントを書き入れて、学生の判断の一助とするとともに、反復学習のための宿題として、毎回5題の翻訳課題が出された。

翻訳指導では、下記の三原則を翻訳の基本として、常に正しく美しい訳文の作成が求められた。

1. 原文の考え方や意図などを的確に伝える。
2. 訳文の全体の風格は原文の風格と合致させる。
3. 訳文は（原文と同程度に）流暢で分かりやすい文にする。

以下に例として示されたものを挙げる。

【中文日訳】

例1 我家闺女还没找到人家，你能不能给说个媒？
（指女子未来的丈夫家）

中国語の「人家」は、複数の意味を持っている。日本語に訳す時に、どの意味であるかをはっきりさせなければならない。

訳文：「うちの娘はまだ、嫁入り先が決まっていな
いから、仲人をつとめてくれない？」

※日本語の「人家」には「嫁入り先」という意味
はない。

例2 张先生一连找了几家单位，人家对他的学历和经
验相当满意，但一听说他已经四十多岁了，就客气地

拒絶了他。(指某个人或某些人)

訳文：「張さんは幾つかの会社を訪問し、先方も彼の学歴や経歴に充分満足していたが、すでに40歳を超えていると聞いたとたん、丁重に断った。」

翻訳には直訳と意識があるが、大多数の文は意識が多いという例。

例3 他说话总是阴阳怪气的。

訳文：彼はいつも持って回った話し方で、本音がどこにあるか分からない。

翻訳する時には、翻訳先の国の言葉の習慣や文化などに従うべきである。中国語の「阴阳怪气」はここでは「持って回る」という表現が該当する。

【日文中訳】

例1 電話に出ませんね。

多くの学生は、「電話が通じない」とか、「私は電話をする暇がない」とかと答えて自分を行為の主体としてとらえていたが、「ね」を使っているから電話に出ないのは第三者であると教えると、みんな納得した。

訳文：没人接电话啊。 / 怎么没人接电话啊。

例2 日本語の特に口語文には、主語の省略が多い。例えば「並んでいるね。」

中国語にどう訳したらいいかと聞くと、「排队啊。」か「排队。」と答えた。主語省略の文では、主語を誰にするか迷うようであるが、これは日本人の会話に慣れて、隠れた主語を中国文に示す練習をする以外にない。

訳文：这么多人排队啊。

翻訳の授業に求められるのは、教師の「鶴の一声＝一方的な指導」ではなく、学生との協働である。天華学院の授業では、その点が重視されており、一部の学生を名指して答えさせるのではなく、与えられた設問に対しクラス全員が共に考えるという授業スタイルが、特に印象的であった。

3-2-4 ビジネス日本語指導

近年、中国では日本語学科を設置する大学が増えたため、日本語学科の卒業生も多くなった。そのため、卒業後の就職の問題が深刻になっている。どのようにすれば激しい競争を勝ち抜くことができるだろうか。また、日系企業での仕事をスムーズにこなせるようになるためには、大学時代に何を学ばばいいのか。この課題のために、またこれからの日本語学科の存続や卒業生の将来のために、今まで以上にビジネス日本語教

育への注力が求められている。

天華学院日本語学科は、3年次に「ビジネス日本語」を必修科目として設定し、一年間を通じて履修させている。教材や講義内容は、学生たちが日系企業に就職してビジネス活動をおこなうという想定で決められる。

多くのビジネス日本語教科書は、ビジネス会話に重点を置いている。しかし、日系企業の経営層への「どのような人材を求めているか」というインタビューの結果では、日本企業の商習慣の理解やビジネスマンとしての気遣い、根回し、自ら考える力などを特に重要視していた。

こうした日系企業現場の意見を取り入れ、ビジネス日本語の授業は、従来のビジネス会話（自己紹介、電話応対、依頼など）の講義内容に加えて、以下のビジネス基本技能及びビジネスマナーの修得にも力を入れている。

- 1) 仕事への取り組み、健康管理、自己マネジメント
- 2) 信頼関係と協力関係
- 3) ホウレンソウ、5S
- 4) 就職活動とキャリアプラン

また、ビジネス会話及びビジネス基本技能の授業では、それぞれ次のような工夫がなされている。

ビジネス会話では、社内や社外で、また上下関係に依じて、依頼や提案などの場面において適切な言語運用をマスターすることを重点課題とし、日本で出版されたDVD付きの教材が用いられている。学生は、DVDで場面ごとの会話映像を見ながら会話を実際になぞり、その後に各自与えられたタスクでロールプレイを行う。

ビジネス基本技能、マナーの教授法においては、学生たちに各学習項目に関連する案件を示し、グループディスカッションと口頭発表を行わせる。たとえば、「自己マネジメント」や「ホウレンソウ」はどのようにして大事なのか、「どのように信頼関係を築くのか」などについて、学生たちは時間をかけて議論する。この作業を通して、彼らはビジネスマンとしてのあるべき姿勢を理解し、企業での仕事をスムーズに展開するノウハウを身につけることになる。

さらに天華学院日本語学科では、ビジネス日本語教育を一層充実させるために、以下に示す2つの計画が進められている。

- 1) 日系企業のビジネスマン（駐在員）を招き、現場の実例で学生たちにビジネスに関するレッスンをを行う。また、学生たちを企業に連れて行き、現場の雰囲気や仕事の段取りなどを生身で感じさせる。

- 2) ビジネス日本語の担当教師を定期的に企業に派遣し、常にビジネス最前線の情報をキャッチし、実際の経験を学生に紹介し、生き生きとした授業ができるようにする。

3-2-5 文学作品選読指導

日本文学作品選読は、日本の文学作品を通して学生の言語能力や文学鑑賞能力を高めることを目的とする科目である。この科目は、中国での日本語言語文学学部の本科学教育ではかなり重要な部分に位置付けられているが、天華学院では、その教授法の改革が主に以下の諸点において積極的に進められている。

1. 教学理念の更新

伝統の教授法では担当教師の説明が主であるが、このような教授法は比較的単調で、学生の学習意欲向上にはつながりにくい。そのことから、天華学院では伝統の教授法を改善し、「教師が主導、学生が主体」という新しい教学理念に立って授業を展開している。

まず「教師が主導」の部分では、学生に文学作品を読ませる前に、教師が作者の生い立ちや当時の社会背景などの関連知識を紹介する。特に作品に描かれた時代背景については、作品の内容理解を助けるために、必要に応じて詳しい解説をおこなう。たとえば、自然主義作家である島崎藤村の代表作「破戒」を読む場合は、自然主義流派の特徴を紹介するほか、この作品のキーワード「穢多」についても詳しく説明する。また、節録作品なら、作品のあらすじをあらかじめ説明することもある。こうした資料や背景知識の紹介は、学生が正しく作品の内容を理解し、作品の持つ社会的意義を認識するのに役立つ。

次に「学生が主体」の部分であるが、これには主としてグループディスカッションの方法が用いられている。問題提起をするのは教師であるが、たとえば夏目漱石の代表作『こころ』を読むときは、学生は何組かのグループに分かれて、二人の主人公がどうして自殺を選んだのかなどのテーマでディスカッションをおこなう。その後、各グループの代表者がディスカッションの結果を発表し、それぞれの発表について互いに評価をした後、教師を交えた最後の論議で結論を出す。学生たちは、こうした議論をすることで、作品内容をより一層理解できるようになるだけでなく、作品が提示する問題を自分の人生の観点から考えるようになる。また、作者に対する関心が深まるので、教師が作品の原著や関連書籍のリストを学生に示して適切なアドバ

イスをおこなうと、いきおい学生は、それぞれの関心に応じて主体的に作品鑑賞・研究に向かうことになる。

2. マルチメディア設備の有効利用

文学作品を文字で読むだけでなく、天華学院ではマルチメディアが有効に活用されている。たとえば、一つの文学作品の学習が終わった時点で、学内のマルチメディア設備を利用して、その作家に関するドキュメンタリーや関連する映像を観る。もちろん同名作品が映画化されていれば、それを鑑賞している。これは、作家と作品への理解を一層深めるための試みである。ただし、ドラマCDの場合は、学生の聞き取りが十分にできないと興味が損なわれるので、たとえばストーリーを簡単な漫画に描いて同時に見せるなどする。学生はヒヤリングが助けられると同時に、漫画も見られるということで、この工夫は学生たちには大変好評のようである。

例： 太宰治『走れ、メロス』



3. オンラインコースの設立

2011年末から天華学院のプラットフォームを利用して日本文学選読オンラインコースが設立された。現在アップされているのは、夏目漱石『こころ』、森鴎外『舞姫』、川端康成『伊豆の踊子』、谷崎潤一郎『春琴抄』、島崎藤村『破戒』、太宰治『人間失格』『走れ、

メロス』などの作品に関する資料であり、他の文学作品の資料も徐々にアップされる予定である。また、オンラインコースには、「もっと読もう」というコラムが設置されており、このコラムからインターネット上の電子図書館である「青空文庫」にもつながるので、学生は授業の時だけでなく、読みたいければいつでも興味のある本を読むことができる。さらにインターネットコースには掲示板も設置されており、学生は自分の感想や疑問を自由に発表できる。これらの仕掛けは、彼らの勉学意欲の向上に繋がるものと思われ、とても良い試みである。今後は、アップ資料の充実や掲示板の活用などが一層図られるよう期待したい。

3-2-6 古典指導

古典指導は、生涯学習の視点から、大学卒業後も折に触れて古典に親しむことを究極のねらいとしている。そのため授業は、1) 古典に対する興味・関心を深め、古典に親しむ態度を育み、2) 新しい文化を創造するときの鑑として古典を読む意義を理解することを目標として展開される。

第1の目標、古典への親しみを深める手段としては、古典の音読・朗読がおこなわれる。学生は、古典を声に出して読むことで、文語表現の持つリズムや響きを感じるとともに、古典の世界に全身で浸る。実際、音読することで、読解だけでは得られない日本語の感覚、特に文字表記と発音・音声の関係、古典独特の語彙や文法など、古典が織りなす世界が学生をとらえる。そのことで、彼らの古典を読解し鑑賞する能力は、確実に高まるものと思われる。

第2の目標である古典を読む意義に関しては、まずは古典を通して昔の日本人が、それぞれの時代状況の中でどのような生活をしていたか、どのようなものの見方・感じ方・考え方を生きていたのかを理解する。そのうえで現代との共通点・相違点を考える。この二つの手順を経て、学生は日本文化の特質や現代における継承のありかたを認識することになる。さらに、日本の将来について、その知見を生かして洞察することも可能になるであろう。そしてまた、この学習を通じて学生たちは、古典に親しむことが、日本のみならず自国の文化・歴史を知るうえで、とても良い手段であることに気づくに違いない。まさに温故知新を実感する授業とも言えよう。

ところで、古典を読むためには、やはりきちんとした古典文法の知識が必要である。天華学院では、その指導を次の三段階でおこなっている。まずは①古典の

文法的知識を習得させる個別的・機能的な指導、ついで②適切な時期に、ひとつのまとまった体系として文法を理解させる指導をおこない、最後に③そうして得られた文法の知識を、実際の古典読解に適用して、古典を深く読み味わうことの面白さを実感させる。第三の段階になると、後述するように、たとえば助動詞・助詞を例にあげて、書き手（話し手）の「表現意識」に着目した古典の読み方を教えることも可能になる。この三段階指導は、文法指導としてはきわめて効果的な方法であろう。

三段階指導法の効果を、実際の授業の例で見てみよう。第二段階で「体系としての古典文法の指導」をおこなうが、その後の第三段階で、その体系の背後にある日本人のものの見方・とらえ方に目を向けさせると、発見のある学習展開となる。たとえば、「助動詞の意味による分類」の学習であるが、一般的にはそれぞれの意味立てごとに該当する助動詞をあげて、それを覚えさせる。しかしさらに、助動詞分類表の背後にある平安貴族のものの見方を探らせてみる。そうすると学生たちは、①推量の助動詞が多いことに気づくので、②平安時代の助動詞にはなぜ推量の助動詞が多いのかと問う。そして③この事実の背後には、平安時代の貴族が断定的な言い方を避けて、ものごとを婉曲的に表現することを好む傾向があったということを理解するという展開である。このように、文法的事象の背後に「人間の姿が見える」指導をおこなうと、退屈になりがちな文法学習も面白いと学生に感得させることができるであろう。

4. 卒業論文の指導

天華学院日本語学科における卒業論文指導は、上級日本語教育の一環として設けられており、日本語による8,000字以上の論文作成が要求される。

論文の指導は、すべて講師クラス以上の教員が担当する。論文の質保証のために、教員一人当たりの指導学生は、5名以下と上海市教育委員会によって決められている。論文のテーマは、日本語学、日本文学、日本文化が中心であり、日本社会、経済に関するものも含まれている。6月の卒業にあわせ、論文指導は前学期の10月に始まり、翌年の4月までの半年間にわたって行われる。指導の詳細は次頁表1の通りである。

卒業論文を書くことによって、問題意識、調査実施能力、問題分析・解決能力、論文作法が身に付くと

もに、日本語表現能力の飛躍的な向上が期待される。2013年度の卒業生を例にすれば、72名の学生のうち、1次口頭試問に不合格の学生は1名のみで、当該学生は修正を重ね、2次試問には合格した。やはり卒業論文執筆は、教師にとっては日本語指導の成果を実感出来るという意味で、学生の側は達成感を感じることができるということで、最終的な指導段階として有効であることは確かであろう。

表1 卒業論文指導の流れ

段階	期間	内容
1	10月 ～ 12月中旬	1. 指導教員と個別面談.
		2. 指導教員の指導に従い、題目選定.
		3. 参考文献、先行研究の収集、報告の作成、提出.
2	12月中旬 ～ 1月末	1. 先行研究を含め、卒業論文に関する資料を読む.
		2. 必要に応じて実践や調査などを行い、各章の要項作成.
		3. 1月末までに論文を提出.
3	2月上旬 ～ 3月上旬	1. 論文の修正を繰り返す.
4	3月上旬 ～ 4月上旬	1. 論文を完成し、修正済みの論文を提出.
		2. 口頭試問.
		3. 1次口頭試問不合格の場合は2次試問を受ける.

5. 天華学院における日本語教育の課題について

5-1 カリキュラム

中国の大学における日本語専攻科では、従来までの実用本位の外国語教育から、①日本語学の専門性の確立、②日本語以外の専門的知識の習得、という二つの方向への流れが生まれつつあるという。特に①の流れは、日本語を体系的な学問として位置付け、今までの単なる日本語運用能力に加えて、日本語の理論・知識を身に付けさせようというものである。しかしながら、現在の天華学院日本語学科のカリキュラムは、いまなお文法教育が中心であり、日本語に関する体系的な専門科目の配置をおこなっていない。実のところ、学生や社会のニーズはいまだ実用本位であり、しかも今後しばらくその状況は変わらないと予想されるからである。また、②の流れにしても、実際のところ、単位積み上げ型のカリキュラムのままでは、他学部の講義を履修してもう一つの学士号（デュアル ディグリー）を取得することは、不可能である。

以上のような事情から、天華学院の日本語科では「従

来型」の学としての日本語教育が続けられてきている。しかし、学科目標に掲げる「ハイレベルの日本語力」を身につけた、実社会で活躍できる人材の養成を目指すなら、履修科目の中に異文化間コミュニケーション関連科目や、社会心理学などの科目を設置することは必要であろう。また、『日本経済新聞』などを読みこなせるような商業・経済日本語科目、ガイド日本語などを選択科目として開講することも視野に入れるべきと思われる。ただ、大学教育全体が総単位数を圧縮する傾向にある中で、何を必修科目として残し、どのような選択科目を置き、また限られた授業時間数でどのように人材養成目標を達成するか、いずれにしても、そうした観点からのカリキュラムの見直しは、単に日本語学科のみならず、一私立大学としての天華学院に突きつけられた喫緊の課題と言えよう。

5-2 シラバス（学習項目一覧表）の問題

天華学院日本語学科の開講科目シラバスのうち、「基礎日本語」のシラバスは、使用テキストから見る限り〈構造シラバス〉となっている。その他の「会話」「聴解」「作文」および「総合日本語」では、〈場面シラバス〉、〈機能シラバス〉〈話題シラバス〉が渾然一体となっている。実のところ、「基礎日本語」以外の授業内容は、毎年、担当教員の裁量に任されており、よく言えば柔軟な展開が可能な授業となっている。しかし、これらの科目は必修である以上、また日本語応用能力を高めることに直結する授業であることからすれば、授業内容、すなわちシラバスは学科レベルで入念に検討した上で決められるべきものであろう。

シラバスについては、各シラバスの特徴を把握しておくことが重要である。たとえば、主として文法の学習項目からなる〈構造シラバス〉には、以下のような長所がある。

- (1) 学習項目がはっきりしており、一つずつ学んでいくことができる。
- (2) 基本的で簡単なものから難しいものの順に学習でき、学習者の負担が少ない。
- (3) 高度な日本語文法の学習まで到達目標を設定することができる。
- (4) 「易→難」になっているので、絵などのほかに、既習の文法項目だけを用いて新しい文法項目を導入することが比較的容易で、直接教授法を用いても教えやすい。

しかし一方、構造シラバスには次のような欠点もある。

- (1) 教室外で学習者が実際に必要とする表現が、なかなか学習項目として出てこない。
- (2) 文法は理解し覚えたが、実際には使えないということが起こりやすい。

このように、単一のシラバスのみでは不足する内容が生じるが、それについては適宜〈場面シラバス〉など他のシラバスを導入することが、日本語運用力を高めるために有効であろう。そして、さらに必要なのは、日本語科目相互の連携である。各科目の教育目標を明確にするとともに、日本語科目全体としての到達目標に向けて、それぞれの科目がどうあるべきか、その観点からシラバスを決定する。そのためには、日本語教育専門家によるコースデザイン、担当教員全員のコンセンサス、教育目標に適した教材・テキストの選定などが求められるが、いずれも現在は充分ではない。今後、総単位数削減、授業時間数減少が進む中で、現在のような担当教師任せのシラバスでは学習効率が落ちることは間違いない。その結果、卒業時の学生の日本語レベルが目標通りに達するのは困難となる。早急に日本語科目相互の関連を考えたコースデザインとシラバスの検討が望まれる。

5-3 学生の定員割れ

近年、中国では、18歳人口の減少と大学の増加により、定員割れの私立大学が増え続けている。3773.com.cnのデータによれば、2009年～2013年の5年間の上海の大学入学統一試験（高考）受験者数は下表（1）の通りである。

表（1）上海の大学入学統一試験（高考）の受験者数

年	受験者数（万人）
2009年	10.8
2010年	8.3
2011年	6.7
2012年	6.1
2013年	5.9

今後の5年間、受験者数がさらに減少するか、横ばいの状態が続くとみられる。入学者がますます減る中、定員割れの大学、特に私立大学は経営環境が一層厳しくなってくるに違いない。天華学院も例外ではないであろう。ここ数年来、日本語学科の入学者数は毎年減少し、下表（2）のように設立当初の定員数より大幅に減ってきている。

表（2）天華学院日本語学科定員数と実際入学者数

年	定員数（人）	実際入学者数（人）
2005年	100	100
2006年	85	85
2007年	90	78
2008年	90	90
2009年	80	73
2010年	92	78
2011年	69	60
2012年	87	78
2013年	77	67

また、数少ない入学者のうち、日本語学科を第一志望として入学してくる学生は、実際にはごく僅かである。こうして入学してきた学生は、1年の前期のうちはやはり落ち着かず、落ちこぼれやすいという。学習動機が均質でない学生を同じように教えていくのは、大変なことに違いない。大学教育を取り巻く環境が激変する中、天華学院のような私立大学がいかに入学者数を確保し、経営難から逃れ、勝ち抜くかは今後の死活問題、最大課題と言わざるを得ない。

5-4 教師に係わる問題

天華学院日本語学科の教師のうち、若手教師と中堅ベテラン教師はほとんど一流大学の大学院出身である。しかし、教師の大半を占める若手教師は、日本語教育に携わった経験が浅い。また授業での指導方法は、現状では個人任せであり、それぞれが手探りで試行錯誤している。その一方で、各教師が自分の専門領域に閉じこもり、教師間の交流は少ないように見受けられた。その結果、たとえば教材開発がスムーズにいかず、遅滞するという事態が生じている。また、国立大学と比べて、私立大学教師は待遇面や処遇面で差があることは否めず、結果、離職率の高さへと繋がっている。今後、こうした課題や困難を乗り越えるために、若手教師の育成を図り、ひいては日本語教育の質向上をめざして教師間の交流を強めること、一方で安心して教育に携わることができる安定した教育現場の構築が、天華学院そして日本語学科にとって避けては通れない課題となるであろう。

6. おわりに

創立して九年目を迎えた天華学院日本語学科は、比較的短期間で様々な面で立派な成果を挙げてきたと言える。若手教師の海外での国際シンポジウム参加や上級日本語教育の研修班での再教育などから、新しい

教育理念や教育改革に関する情報も大量に入手可能となり、それぞれの教師が自らの実力と課題を自覚するようになってきた。また、目の前の教壇しか見ない者から、幅広い視野を持つ教育者になる変化も見えてきている。日本語教育に関する論文数も増え続けている。しかし、教育現場での活動、特に教材開発の実践は相対的にまだ遅れている。まずは日本語学科の学生の特徴を適切に把握し、社会ニーズに適った学生を送り出すべく、実用性の高い教材の開発に力を入れるべきであろう。そして、グローバル化している今日の社会に向けて、日本語教育はどうあるべきかを真剣に問うべきであろう。

なお今後は、上記の観点から、天華学院における英語教育の現状を日本語学科と比較し、どのように異なっているのか、あるいは共有する問題点は何かについて調査を行い、中国の大学における外国語教育への取り組み、ひいては日本語教育の課題について、更に考察を深めていきたい。

Received date 2014年7月15日

参考文献

- [1] 『新版日本語教育事典』 社団法人 日本語教育学会 2005年
- [2] 『国語教育総合事典』 日本国語教育学会 2011年
- [3] 国際交流基金（2006）『読むことを教える[M]』 ひつじ書房
- [4] 鎌田修、川口義一（2007）『鈴木睦：日本語教授法ワークショップ 増補版[M]』 凡人社
- [5] 国際交流基金（2010）『教え方を改善する[M]』 ひつじ書房
- [6] 国際交流基金（2011）『中・上級を教える[M]』 ひつじ書房
- [7] 仇文俊（2012）「中国の大学におけるビジネス日本語教育の現状と問題点について」『比較社会文化研究』（32）
- [8] AOTS日本語教育センター（2011）『教育機関のための外国人留学生ビジネス日本語教育ガイド』 アジア人財資金構想プロジェクトサポートセンター
- [9] 上海師範大学天華学院教務課編集 『2012级本科培养计划』